

令和3年度 加古川「知」を結ぶプロジェクト 各チーム発表概要・所感・活動の様子

1)

■チーム名：岡村チーム（学内選抜チーム）

■指導教員：岡村 こず恵（共通教育センター）

■テーマ：生ごみから始まる循環型社会ーコンポストタウン加古川育成プロジェクトー

■発表概要

加古川市ではごみの減量をめざして、生ごみ（食品残渣）を分解・発酵させて堆肥を作る「コンポスト活動」の市民への普及に取り組んでいますが、段ボールコンポストのモニター数は伸び悩んでいます。そこで、廃棄物を出さない社会システム（サーキュラーエコノミー）の実現をめざして、①コンポストを広める人材「コンポストマスター」の育成、②堆肥の質の向上・安定を目的とした「農家が使いたい堆肥」の講習会実施や「竹パウダー」の活用、③堆肥の活用先拡充を目的とした「CSA（地域支援型農業）」の導入を提案しました。仮に、加古川市民の半数の協力を得られた場合、年間約9900万円の焼却経費の削減が可能になると試算しました。

■学生代表者所感

代表者：法学部 4年 永野美幸

本プロジェクトを通して、社会で求められるスキルや心得を学ぶことができました。はじめは、方向性が定まらず、チームとしてのまとまりも低かった為、いかにそれぞれが主体的に行動し、参加した意義を見出せるかということに苦慮しました。しかし、現地に赴き直接お話を伺ったり、体験・実践を通じて、企画の面白さに気付くことにより、モチベーションを高めることができました。また、メンバーそれぞれの意思を尊重し、チームとして納得のいく意見が集約されることで、士気が高まり目標達成に繋がると実感しました。これらの経験から、チームで一つのことを創り上げていくことの楽しさを知り、同時にその難しさも学びました。

■活動の様子



2)

■チーム名：望月ゼミ

■指導教員：望月 徹（経営学部）

■テーマ：未来に羽ばたく 加古川かわまちづくり

■発表概要

加古川市の重点施策「かわまちづくり」について、企業との連携により若者へチャレンジを与える場作りの観点から、活性化の提案を行いました。

加古川に縁のある企業にヒアリングを行い、企業ニーズや企業の関わり方の濃淡を踏まえ、現実的に対応案を検討しました。具体的には、ニッケヤJRを核に、大阪市天王寺地区の「てんしば」のようなパークマネジメントを段階的・計画的に展開し集客施設としての魅力をアップしていくことにより、加古川は、「ミズベリングの聖地」として全国ブランドになりうる。我々もその早期実現を期待しています。

■学生代表者所感

代表者：経営学部 2年 田邊大登

今回の活動を通して加古川市を知らなかった人が加古川市について知り、深く理解することが出来たこと、1つのことに対して全員が真剣に取り組めたこと、企業に電話するなど普段は行わないことを出来たことが良かったと思います。しかし、意見がまとまらず、中間発表の後にはベースから考え直す等苦勞したこともありましたが、自分たちの思うようにできないことから諦めかけたこともありましたが、全員で協力して最後までやりきることが出来たと思います。ゼミ全員が1つになって、いい発表が出来たと感じています。

■活動の様子



3)

■チーム名 : 金坂ゼミ

■指導教員 : 金坂 成通 (マネジメント創造学部)

■テーマ : アウトドアで育つまち・加古川

■発表概要

本チームは「市の魅力発信」をテーマに研究に取り組みました。転居を考えるライフイベントの調査結果から、施策のターゲットを20代から30代の子育て世代に定めました。市内視察、Web調査やニッケパークタウンでのアンケート調査により、加古川市の魅力は「アウトドア」にあることを論証しました。そしてそれをPRする具体的な手法としてターゲットを絞った新たなInstagramのアカウントを作成することを提案し、その投稿には位置情報やハッシュタグを付加すること、通常投稿以外の機能（ストーリーやインスタライブ）の活用が重要であることを指摘しました。またアウトドアイベントにおける投稿例や、子育てに役立つ情報（公園など）の投稿例を作成し提案しました。

■学生代表者所感

代表者 : マネジメント創造学部 3年 坂頂なつき

加古川プロジェクトでは、協調性と主体性を両立しながら課題の解決にあたった。加古川市の今もつ魅力を最大限活かしつつ、何をどのようにPRすれば若者に興味を持ってもらえるかを考えた。フィールドワークやアンケートなどから考えられることを積極的に出し合い、さまざまな意見に耳を傾けることで考えの幅が広がった。グループの方針が固まってからは、各々で主体的に仕事を見つけ、協力して報告をまとめた。その中でも、伝えたいことに対してアンケート調査や様々なデータといった根拠を示し相手に納得させることの必要性を強く感じた。入賞することはできなかったものの、仲間と共に考え抜き納得のいく提案ができた。このグループワークで培った協調性と主体性を今後の学びに活かしたい。

■活動の様子



4)

■チーム名：岳ゼミ

■指導教員：岳 五一（知能情報学部）

■テーマ：『加古川市スマート情報発信システム』-システム構築と効果的な情報発信手法の確立-

■発表概要

市のこども政策課が抱える情報発信に関する課題解決に向け、子育てを中心とした市政、市民生活に関する情報を収集・統合し、効果的に発信する「加古川スマート情報発信システム」を構築しました。本システムでは、子育ての関連施設が一目瞭然でわかる「子育て支援マップ」や、市政情報を1つに集約し、多言語での情報提供が可能な「子育て情報まとめサイト」等の多様な機能で、市民の方々にわかりやすく、効果的に情報を届けるようにしました。更に、市民の方々に本システムを利用してもらい、多くの利用者から高い評価をいただきました。また、加古川市公式 Twitter のデータを解析し、一人でも多くの人に情報が伝わる最適な発信の時間帯を提案しました。

■学生代表者所感

代表者：自然科学研究科 知能情報学専攻 修士2年 住友千将

市民の方々が満足に情報を収集するためには、「情報にすぐにアクセスできる」ことが必要ではないかと思いました。そこで、「いかに情報を短時間かつ少ない手数で入手可能にするか」を考えました。システム構築の中で、情報を多くのカテゴリに細かく分類すると、1画面に情報があふれて見づらくなり、少ないカテゴリで分類すると、情報に辿り着くまでの手数が増えることがわかり情報発信の難しさを感じました。私達はこれらを念頭に、まず情報を少ないカテゴリに分類し、その後の手数が軽減するよう、ページ移動がなく1つの画面内で、表示内容をボタン操作で切替られるようにシステムを構築しました。その後の利用者アンケートで「見やすい」とのご意見をいただき、とても励みになり、やりがいを感じました。

■活動の様子



5)

■チーム名：足立ゼミ

■指導教員：足立 泰美（経済学部）

■テーマ：起業家の町「加古川」

■発表概要

少子高齢化を伴う人口減少によって、加古川市を含め各地方公共団体は、労働力人口の減少による地域経済の衰退と社会保障費の増大という財政的な負のスパイラルに直面しています。そこに新型コロナウイルス感染症が、拍車をかけています。このような負のスパイラルから正のスパイラルへの転換を目指して、本報告は、加古川市の空き店舗を利用した既存のコワーキングの機能分化と連携強化を図る施策を市に提案することで、新たな起業家の育成による法人二税の増加と、これら起業家が作り出した商品を活用したふるさと納税の増加によって、市の財源の確保に繋がっていきます。

■学生代表者所感

代表者：経済学部 2年 岩本紗英

プロジェクトを通して、私たちは、市のニーズに即した実現可能な提案をすることへの難しさを学びました。机上で作上げた提案は内容が薄く、現地を視察し、直に起業家の皆さまの意見を聞くことで、具体的な提案に至ることが出来ました。ゼミで何度も話し合いを繰り返すことで、報告内容が濃いものになっていき、やりがいと達成感を感じました。

代表者：経済学部 2年 高谷健太郎

私たち足立ゼミは、2学年のゼミ生で参加しました。初めてのゼミ活動として、中間報告では最終地点が定まらず、ゼミ皆で悩みました。mocco 加古川をはじめ5つのコワーキングスペースを視察し、町のにぎわいに繋げるための政策を考え、自分たちの提案に対して、再び起業家から助言を頂きました。最終報告の提案は、ゼミで初めて成し遂げたものとなり、感慨深く貴重な経験となりました。

■活動の様子



6)

■チーム名：西村ゼミ

■指導教員：西村 順二（経営学部）

■テーマ：ウォークブルシティの実現によるスマートシティへのアプローチ

■発表概要

多数の地域資源があり、多様に散策ができる加古川市の魅力を再発見・育成して、ウォークブルシティを実現することを目指しました。街を市民や観光客が歩いて回り、地域コミュニティを知り、地域資源を楽しみ、交流・コミュニケーションし、情報発信し、フィジカルにもメンタルにも健康を目指し、自己実現を得るために、携帯スマホを活用したアプリケーションを考案。自身のオリジナルコースとアプリによる推奨コースの両者を内在したオフラインとオフラインのハイブリッドを提案しました。また若者と高齢者との関係性を構築する招待コードの活用を導入し、多様な世代への訴求を目指しました。

■学生代表者所感

代表者：経営学部 3年 蒔野大貴

本気で取り組み、本当に良くしたいと思い、私たちの案で加古川市がもっと賑わって欲しいと想いを込め続けた4か月間でした。正直なところ、楽しいことよりも苦しいことの方が圧倒的に多かったプロジェクトでした。進む中で、他プロジェクトや就職活動との兼ね合いで上手く進まなかったと同時に、対象を深掘りするにあたり、コンプライアンスやコロナ禍を踏まえた厳しいお言葉を頂き、予定していた案を発表の2週間程前に訂正し、提出ギリギリまで取り組みました。幾度の困難を越え熱中した成果は、最優秀賞という形で報われ、私たちの努力に花が咲きました。いつか、私たちの案で、加古川市がもっと素敵な街になればと思います。

■活動の様子

